

2016年3月13日(日)

2015年度第4回 国際協力の分野における「ワークライフバランス」
ワークショップ パネリスト報告概要等について

【八千代エンジニアリング(株) 保希未子様によるご報告】

・JICA インターンシップ・プログラム経験者。本年2月から「開発コンサルタント」として勤務。2014年から東京大学大学院(国際協力学)に進学。現在、14歳/2歳の男の子を育てており、3足の草鞋で奮闘中。

- ・「キャリア形成における取捨選択」→「やりたいことは全てやっている！」
- ・「課題への取り組み方」→「方針・実施要領を決めて、諦めない！」
- ・「キャリア開発」のキーポイント→自分を1プレイヤーとして、物事を客観的に俯瞰する。「知」(例えば、大学院進学)をつけて課題解決能力を上げる。(客観的な視点を得る/自分を多面的にとらえる)
- ・「今後の目標」

短期目標：①仕事/生活スタイルに慣れる ②修士号を取る

中期目標：仕事面では、専門性の深化、仕事の幅の拡大。私生活では、子どもと世界の素晴らしさの共有。

長期目標：世界平和に貢献する

【(株) コーエイ総合研究所 長井圭子様によるご報告】

・最初は一般職(補佐)からスタート。総合職に転換し、大学院(医科学修士)に進学。30代から開発コンサルタントとしてスタート。社会保障、看護教育、セクター調査等、保健医療分野を中心に、様々な業務に従事。2010年の職場復帰後は、子どもさんが1歳3か月の時に海外出張も再開、保育士の資格取得。現在、ベトナムを中心に、年に複数回の海外出張を「総括」としてこなす。

- ・「出産後のキャリア形成」→新しい課題(生活習慣病、社会保障等)に対応できるよう、研修や勉強会への参加、人脈の形成に留意。また、マネジメントスキルを養う。
- ・「ライフイベント(出産・育児)の効果」→日本の母子保健・医療制度を実体験。多様なママ友を通じた異業種の世界や子どもの目線を知る。その他、タイムマネジメント、気持ちの切り替え、忍耐力・共感力アップ。
- ・「保育士」の資格→小児保健・栄養、発達心理学等、自分の専門性と親和性あり。育児にも役立ち、またいざとなったらこの資格を使うという心の支え。
- ・「海外出張」→出張の制限をいかに補うか。社内上層部も模索。社内業務(国内支援、人材育成等)を積極的に引き受ける。

- ・「総括」（管理職）としての業務→チームメンバーの構成に留意。リーダーは一人で荷物を背負いがちだが、みんなで背負う。メンバーが一人抜けても他で補完できるようなチーム運営。自分が不在の時、責任は自分が負うが、基本チームメンバーに任せる。
- ・家族や親族のサポートは不可欠。親への感謝を忘れない。親の不便や不都合の改善。海外出張が決まったら、子どもには出張期間、目的、行き先をしっかりと説明。

【JICA 横浜/NPO 法人マドレボニータ 広瀬恵美さんによるご報告】

- ・1994年にJICA入団後、海外長期研修制度を活用してイギリスの大学院に進学。帰国後は、主にアフリカ関連の業務に従事。ガーナ事務所での勤務経験あり。帰国後、日本の大学院で修士号を取得。
- ・結婚前から、SVP 東京にて、組織化を目指す NPO 法人マドレボニータの活動を支援。
- ・「マドレボニータ」の活動紹介：出産後、子どもへのケアはあっても、産後女性へのケアは殆どない！→産後ケアの必要性を社会に啓発し、産後ヘルスケアプログラムを多くの産後女性に届けるために、「産前・産後のボディケア&フィットネス教室」を開催。また NEC との協賛で「母となって働く」をテーマに、地域とのつながりを大事にした「ワーキングマザーサロン」を開催。同サロンでは、ファシリテーター業務を体験。
- ・「母となって働く」を語る場の必要性→公園や児童館などでのママ友と、今後のキャリア形成などについて深く語るのは難しい。「ママ友」とは共有しきれない悩みを語り合い、じっくり自分に向き合う。相互作用も生まれる貴重な2時間。
- ・「マドレボニータ」の活動に伴う自分の変化→「人生」「仕事」「パートナーシップ」をキーワードに、「制約」をまず考えるのではなく、自分はこうありたいということを考えるようになった。自分一人で抱え込まず、家族や周りの人を巻き込むことが必要。サロンに20回ほど参画したが、毎回異なる「気づき」を得ている。これまでの活動を通じて貴重な人的ネットワークも得た。
- ・出産・育児を通じて得られた貴重な経験が自分の財産。参加者にも、是非色々なことに参画してもらいたい。

【一般社団法人ドリームマップ普及協会 川村紀子様によるご報告】

- ・約20年JICAに勤務。フィリピン事務所、人事部等に勤務。人事部では、仕事と家庭の両立支援、職員の人材育成等を中心に、JICA 職員が働きやすい職場の確立に尽力し、公私を含めたキャリアプランニングの重要性を実感。2012年に退職し、現在「ドリームマップ普及協会」理事として、ワークショップの開催や小中学校等での授業を行う。
- ・10代から国際協力への思いはあり、JICAの業務にやりがいを感じていたが、東日本大震災を機に優先順位が間違っているのではないかと考えるようになった。子どもの成長を見守ることを最優先にしたいと退職を決断する。

・「ドリームマップ」は「自分がどんな風に生きたいか」(夢)をイメージする目標達成ツール。仕事を始めてから、就業時間・就業場所・就業日が自由な働き方のため、仕事と個人の生活の融合が容易に図れるようになった。「ワークライフバランス」というよりも、「ライフワークを生きている」という実感を得ている。

・人生には、病気や子どものことなどを含め、予想しないことが起こりうる。1日1日がとても愛おしく、以前よりも貴重に感じられるようになった。

・自分とつながりのある人を全力で応援し、その輪が世代や国境を越えて広がることを願っている。目の前にいる人の幸せを願い、人生を通して自分がやりたいと思っていることを心に持ち続けることが大切と感じている。

【パネルディスカッション】

Q1：国際協力の世界でモチベーションを維持していく秘訣は？くじけた時にどう立ち直ったか。乗り越えたか。

A：目標をノートに書き出す。具体的に何が必要かを洗い出し、いつまでにそれをやらなければいけないのかスケジュールを立てる。長期目標達成までのアクションプランを日々の生活の中に落とし込む。

A：仕事でプレッシャーを強く感じる時にやめたくある時があるが、夫に「もうやめてもいいかな」と言うと、「この1件終わったら、相談しようか」と返される。自転車操業のようだが、仕事がひと段落した後、業務関係者も含めてみんなから「ありがとう」と言われる一言が励みになる。

A：結婚前の海外勤務時の経験。若い頃に赴任したが、現地スタッフをマネジメントする必要があった。やり方が分からなくて、現地スタッフから反発を持たれたことも。後で落ち着いて考えると、一人で頑張ろうとしすぎた面もあったのではないかと、反省。

A：「自分はどうなりたいのか」を念頭に、視点を変えてみる工夫。

Q2：国際協力の分野で働き続けるにあたって、特に重要と思われることは何か。

A：普遍的ではあるが、「熱意」。絶対やってみせるといふ思いと、周りと交渉していく力があればどんなことでも可能と考える。

A：「想像力」。例えば、自分が向き合っている開発途上国のカウンターパート（協力先のプロジェクト等の関係者で、技術移転の対象者）の立場を想像し、考えられる力が豊かなこと。

A：チームとして動けるかどうか。問題があった時に、自分一人ではなく、チームでどう解決していくか、を考えること。それは、会社のみならず途上国においても共通。

A：ビジョンを描く力と共感、また共感を得る力。自分がやりたいことは一人では成し得ない。具体的にどう働きたいのかを描き、それを人に伝え、共感を得ること。

【プログラム後半】

プログラム後半では、川村さん及び IAF-J（国際ファシリテーター協会日本支部）のファシリテーションの協力を得て、3名の少人数に分かれてグループディスカッション（ダイアログ）を行い、個人ワークである「ドリームマップ」作成につなげました。

ディスカッションでは、「仕事&個人の生活共に充実し、生き生きと過ごす未来」に向かって2030年の自分を想像し、問い1「自分にとっての理想のライフスタイルは？」、問い2「どんな人とつながり、誰の笑顔を見たいですか？（仕事と個人の生活の両面から）」を設定し、途中、グループのメンバーチェンジも3回行い、多様なメンバーで意見交換を行うことで新しい「気づき」を得られるように留意しました。

以上